

映画<ザ・ハリケーン>を見た。途中から前にも見たことがあるぞと思いながら、これはいい映画だと感動しつつ一生懸命に見た。実話を基にして創られた映画だそうだ。

解説氏の弁：カーター役のD・ワシントンがアカデミー賞主演男優賞候補に。少年との交流による閉ざされた心の解放を説得力たっぷりに演じ演技派としての力量を見せつける。1966年6月17日、ニュージャージー州パターソン。ボクシングのウェルター級チャンピオン、ハリケーンことルービン・カーター（デンゼル・ワシントン）は強盗殺人事件の犯人として検挙され、翌年終身刑を宣告された。すべては彼を幼年時代から知る仇敵の刑事デラ・ペスカ（ダン・ヘダヤ）のでっちあげ捜査によるものだった。収監後も囚人服の着用を拒み、無罪を主張するため自伝を執筆。74年、こうして出版された自伝『The 16th Round』は反響を呼んで、ボブ・ディラン、モハメド・アリら著名人が釈放活動に乗り出したが、2年後の再審でも有罪判決が下り、彼の存在は次第に世間から忘れられた。だが、隣国カナダのトロントに住むレズラ・マーティン（ヴィセラス・レオン・シャノン）という黒人少年が古本市で見つけた例の自伝に感動し、手紙を送ったことがきっかけで再び希望が。レズラの保護者であるリサ（デボラ・カーラ・アンガー）、テリー、サムら3人もレズラに賛同し、釈放運動のために立ち上がる。85年11月7日、連邦最高裁判所での最後の戦いに挑むルービンと4人。この結果、サロキン判事（ロッド・スタイガー）は再審の有罪判決を覆し、即時釈放を認める判決を下し、ルービンらは歓喜の渦に包まれるのだった。

主役の役者が上手い凄い、実話を絡めたストーリーも面白い、ボクシングの試合場面、牢の中での闘争場面、時間が経って聖者の雰囲気醸し出した主役、最後までとぼけた判事、人種差別、奴隷問題、映画は楽しめた。実話はどうなのか、本当に無罪なのか、本当は犯行を行っていたのか。アメリカ社会の黒人問題、50年前にはまだまだ黒人は参加できない、入場できない、同じ乗り物に乗れない、というように目に見えた差別、結婚しない、仕事をさせない、学校に入れない、というような意地悪差別、オレ若い頃見たアメリカからのニュースが目につく。

ちょうど時を同じくして、日本の死刑囚、彼もまた同じプロボクサー、袴田さんが放免された。司法の事はよく解らないが、殺人強盗罪で死刑が確定していた袴田さんに対して、静岡地方裁判所が再審開始を決定した。再審でという事はもう一度法廷で容疑者として取り扱われる、無罪になる確率が高いのか、低いのか、門外漢なので解らないが、無罪という声もこれからしばらくかかりそうだ。30年40年も経ってしまえば、自分自身でさえも犯人なのか犯人でないのかわからなくなってしまい、精神的に自分自身の感覚、平衡感覚がまっすぐに見られる、まっすぐに前に向かって進めるとは限らない、オレも自身を客観的に観察してみてもまったく自信が無い、まして塀の中、牢屋につながれ死刑宣告の後の時間が経っていく日々の状態の中で、平常であれ、正常であれとはなかなかいえない。司法の世界とは何故こんなに時間がかかるのか、不思議で、怖い、それこそ物の怪の世界、魑魅魍魎の世界、「お前は罪を犯したんだ」「お前は罪人だ」と罪人を作り上げることも簡単にできる、というような世界は、世界の何処でもつい最近まで、むしろ今でも在りそうな気がする。

何年前かに検察審査会に選ばれた。裁判員制度が出来る前“検察審査会”とはなんだろうと思いつつ、恐る恐る中ノ島にある大阪地方裁判所に出勤した。穏やかに説明してくれた人が長谷川さん、彼が半年間十数名の我々選ばれた審査員を迎えてくれ、会議を説明し、評決を取ってくれた。余談だけれど、懇親会も1.2度あり、オレの個展にも顔を出してくれた。何をするかと言えば、間違っているかもしれないが、「悪いやつが居る、こいつを罰してやれ」と訴えてくる人の訴えを審査する、正確には検察官が被疑者を裁判にかけなかった事の善し悪しを審査するところだ。我々が出勤する前に事件が簡単に纏めてある、それをまず聞いてから、会議に出席した十数名が各自警察官や警察官が作った分厚い調書に目を通し、「これは起訴しなければ」「これは不起訴」と評決する。検察審査会体験記は後日語らねば。

海を見た「これは多分海だろう」何故こういふかという、向かいに大きな建物が見える、運河なのか、川ではない、淀川はもう少し向こう側、淀川なら河口とはいえまだこの辺りは水が左から右に流れているはず、と目の前の満々とした紙面を見、これは海、海の実境にオレは立っている、これは海でいい、素晴らしい、大きく広がったいい景色だ。地下鉄朝潮橋駅を降りた、この辺りは地下鉄とはいえ高架だ、走りながら車窓を見るとちらり水が見える、海だと思おうとウキウキする。海と山とどちらが好きですかと聞かれたら、即座に「山だ」というだろうと思いつつながら、海は憧れている自分、海は見たい、海の傍はいいと思いつつもしばらく眺めていると飽きてくる、見るだけではつまらんと歯がゆくなる。もうそれ以上どうにもできない、海には親しめない海をどうしていいのかわからない、泳げない、潜れない、船に乗れない、魚釣りもできない、逆巻く荒波などんでもない、というようなことで、「あ、海だ」としばし感激したらそれで終わってしまうという事かも知れない、といいつつ海を見たい海に近付きたいという気持ちは不思議だね。そのてん山は歩ける、登れる、見つめられる、感じる、どんどんその中に入っていける、とオレ自身がアクティブになれることが良いのかもしれない。「さあ海に着いた船に乗り換えて魚を釣るぞ」と魚の事を考えぞくぞくするとか、「さあ泳ぐぞ、さあ潜るぞ」と海の中の自分、泳ぐ姿を想像し、空中回転ならぬ水中回転をする姿を頭の中で想像するだけでぞくぞくするというような事ができれば、山と同じように海にも一歩も二歩も近づけるのだが。

朝潮橋の駅を降りて少し歩くと高い塀の向こう側に海が在った。この辺りは倉庫街、高い塀は防波堤、防波堤の所々に扉が在り、その扉が開いている。大型トラック、小型トラックが行き交い、トラックの隙間にフォークリフトが走り回る、荷を乗せたフォークリフトが荷を持ち上げ、荷を下ろし、右に左に動き回る。突堤の鉄の門扉の間から海の匂いが、潮の香りが微かに感じられる、こんな都会の倉庫街の海も、砂浜が広がる海と同じ匂いが、香りが漂う。門扉を抜けて海に近付くと左の方に大きな橋が微かに見える、あの辺りから向こうは大阪湾、大阪港駅付近の観覧車も見える、午後の太陽が遠い彼方の海を霞ませ橋と観覧車が小さく見える。右の方には高架電車が建物の間を横切るのが見える大阪の市街地が見える、向かいにはマンション、遊覧施設 (UFJ)、かの有名な“ゴミ焼却場”が見える、立っている処から水面まで相当に深い、大きな船が停泊しても大丈夫とでっかい鉄の塊、こいつに船を結 (ゆ) わえるのだ。下の水は黒く冷たそう、あそこには落ちたくないね。かの有名な“ゴミ焼却場”とは「あの煙突の先に付いている飾り一つが100万円」「とんでもない贅沢」「あんなものは税金の無駄」「大阪にはあんな施設はいらない」「まして、ゴミの焼却場だよ」と悪評高い“ゴミ焼却場”が在るけれど、オレは「よくぞあんな素晴らしい物を高い金を払って作った、いいじゃないの」といつも喝采を送っている。興味のある方は<大阪市舞洲ゴミ処理工場>を検索してください。もう一度言いますが、オレはフンデルトバッサ一作、このゴミ処理場のデザインは好きですよ、絵もなかなかいいですよ。

多分海だろうと初めに言ったのは、海か、運河か、川か自信が無かったが帰って地図を見てみるとこれは海と言っていいのでは、元々この辺りは海、その海を埋め立て陸地を作った、陸地がどんどん増殖し、あつちにこつちにつぎはぎだらけに陸地が出来ていった。自然に出来上がった地形、何十年何百年かかって自然に出来上がったくねくねの陸地ではなくすべてが直線で出来上がっている、地球の形としては人工的すぎる。大きな船が入ってきても底を擦ることもない、少々でかい船でも問 (つか) えることもない、そんな海の深い処に棒というか板というか金属で出来た長い矢板を打ち込み、海の中に仕切りを作り、石や土を投げ入れ陸地を作る、凄い工事だ、人間は凄いことをするものだ、そんな深い海に高速道路を作り、トンネルを掘る、すごいすごい。

大雨が降る、川が溢れそうになる、と騒ぐけれど、大雨の水も乾ききった河口も海にはさほど影響がない、海の水が陽に照らされ水蒸気となり、山で大雨が降り、川を流れて海に帰る、考えてみればこれだけの事、もっと言えばその時にその場所に自分が居るから見られる事、感じる事で、それが害なら被害者になる、それだけの事だ「愚か者メ、それが大変な事ナンジャ・・・」と天の声。

3月の展覧会前にとある団体から電話が「なかなか捉（つか）まらなくて困っていましたが、やっと繋がりました、ご無沙汰していますが、まだ肖像画をやっていますか・・・」と有難い電話、久しぶり、金儲けの連絡「連絡がつかずにすみません、やっております」「具体的な話が決まったら再度連絡します」という話が具体的に動き出した。9枚の肖像画の注文である。「お前さん、肖像画なんて、描けるのか」知人友人たちはびっくりするかもしれないが、有難いことに、CG<コンピューターグラフィック>という武器がある、これを使えばオレにでも描ける。技法は簡単でそれぞれの方の写真を撮る、一人に30枚40枚の写真を撮ってその中から「これはいい顔だ」と思えるものを選び出す、photoshopでレタッチ（加工）をする。背景はヨーロッパの古典、レンブラントのようなセピア色の背景を使う。背広はほとんど黒に近い色にする、白いワイシャツ、ネクタイ、顔もややセピア調にレタッチする。そのデータを6号大の大きさにプリントアウトして木製パネルに張る。その上から絵具で描き込んでいく、我ながら上手くいくもんだとほくそえんでいる。

その注文主の方々の顔写真を撮るために今週はいろいろな路線たくさん電車に乗った、行ったことのない処にも行った、来たことがあるぞと思いたす場所もあった。今日行ったのは森之宮と浅香山、先日は徳庵と久宝寺、翌日は朝潮橋、今回の注文でもない限り行った事もない処、知らない処「変わってしまった」と驚く処「変わってないなあ、同じだなあ」とほっとする処と様々だった。

浅香山：二十歳代にキャンバスを作っている処を見に行った、電車で行ったのか車で行ったのか忘れてたが、わが妹が「キャンバス買に行った・・・」と覚えていた。当時彼女の親父さんからマツダのキャロルを借りていた、というよりほとんど貰っていた、乗り回していた、それに二人で乗っていったような気がする。キャンバスを作っている家内工場に行くと、麻布を吊るしてベテラン爺様が下地の糊を塗っていた。膠を竹べらで塗っていたような覚えがある、白く塗られたキャンバスもたくさん吊るされていた。糊だけのアブソルバントキャンバスと普通のキャンバスを買って帰った記憶がある。電車の線路の傍、少し坂があったような幽かな記憶だが、今日浅香山駅に近付くと関西大学のキャンパスが出来ている、40年前の幽かな記憶の場所は全くわからない。肖像画用の写真を撮り終わって南海高野線浅香山駅に着くと地図がある、見ると阪堺電車<チンチン電車>が近くを走っている「これは乗らねば」と10分ぐらい歩いた、まだかなと思って不安になった頃に線路と踏切を発見、踏切内に入ってみると左の方に駅が見える、「まさか線路内を歩くわけにもいかない」とぐるり回ってみると、踏切がありそこからホームに入れた。「チンチン電車は、地域の宝」とキャッチフレーズ「全区間200円」これは安いと思うが、たったひと駅ふた駅乗っても200円と怒る人もいるだろう。この阪堺電車、幼少のみぎり乗ったはず、多分“お嬢ばあさん”に連れられて乗ったはず、とはいえ何の記憶もない。大和川の土手の上に駅がある、住吉大社の傍を走っている、それこそ住吉大社のまん前を走っている、たくさんの古びた石灯籠が建っている、帝塚山、松虫、阿倍野と懐かしい名前、それこそ幼少のみぎり“お嬢ばあさん”と母親の会話の中によく出てきた地名だ。お嬢ばあさんは太平洋戦争の末期焼け出されては引っ越し転々としたようで、それらの地名がその転々の場所である。因みにオレの“へその緒”の箱に書いてある地名は“勝山通り”環状線桃谷駅の近所のような、最終的に“お嬢ばあさん”は阪和線の美章園駅に落ち着いた、それこそオレは幼少のみぎり“お嬢ばあさん”の家に母親と連れ立って何度も遊びに行った、何度も泊まった、それから18、19歳のころには天王寺美術館地下の“天王寺美術研究所”に1年間通った事もあり阿倍野界限はよく知っている、懐かしい。阪堺電車の終点は阿倍野だと思ったら、天王寺だった、此処は40年前50年前と同じ汚さが残っていて嬉しい限り、ただ上を見上げるとガラス張りの超高層ビルが建っている、先日出来たばかりの超高層ビルだ、その横を見上げたら昔からある歩道橋が汚いままに残っている、この歩道橋の上から名物お巡りさんが交差点の真ん中で交通整理をしていたのが思い出される。その年まで餃子という食べ物を食べた事が無かった。「餃子は旨い」と友人知人たちの言葉は聞いていたが初めて食って感激したのは天王寺界限の“珉珉”という店「コーテルイーガー」なんて叫び声が飛び交う店内で舌鼓を打った、まだ酒も飲めなかった幼いオレでした、わが妹と知り合ったのもこの頃、長い長い付き合いである。今度暇な時に、一人で天王寺界限を歩きたい、動物園にも行ってみたい、四天王寺も行ってみたい。

比良山に登った「好きだねえ、比良山が」と言われそうだが、オレは比良が好きだねえ。今回の目的は食事会、そのついでに山をちょっと登ろうかという企画。もう暖かい、晴れている、何の心配もない。冬に二回、隣の北小松から登ったが“釈迦岳”までも登れずに断念、一度は吹雪状態だった、もう一度は膝までの雪、一人でラッセルはバテた。そんな冬の季節の雪は無く、桜が咲き、辛夷（こぶし）が咲いている。白い花をつける木が辛夷かハクモクレンかと調べたら「辛夷とハクモクレンはよく似た花だけれど、花が咲くときに花の下に葉があるのが辛夷、葉が無いのがハクモクレン」だそうで、今回見たのは辛夷だった。登山口から少し登った処のあちこちの山の斜面に桜と辛夷が咲き誇っている、同じように白い花だけれど、山のあちこちに咲く花はとう目には、辛夷の方が華やかで艶やかである。5月6月の信州、まだ雪が残っている斜面に咲く白い花、まるでティッシュを撒き散らしたように風に吹かれて咲いているのをいつも見かけたが、これも辛夷なのかハクモクレンなのかわからないまま“ティッシュの花”と呼んでいる、雪の上に鼻をかんだティッシュを撒き散らしたようなんだ。

比良駅を降りると“イン谷口行き”のバスが停まっていた「これはラッキー」と飛び乗った。何年か前までてっぺんにスキー場があり路線バス、リフト、ケーブルと乗り継いで1000メートルを一気に上がったので、比良駅も賑わっていた、スキー場が廃業して、路線バス、リフト、ケーブルそれに上の大きな二つの小屋、スキーのリフト、あらゆる施設が跡形もなく取り払われてから、もう何年になるのかわからないが、人影もまばら。「350円も払ったのにすぐについた」という人もいるが、駅からイン谷口まで歩くと小一時間はかかる、重い荷を背負っての小一時間と350円とでは350円は意外と安い。リフト、ケーブルの在った頃は雪の季節でもたくさんの登山客が上がっていたが、最近ではほとんどの登山客が堅田で降りて別のバスに乗るようで、今日もリュックを担いだ人は何人か駅を降りただけ。それでも「土・日だけでもイン谷口までバスを」という要望を受けてバスを運行するようになったとか。今日もバスの客は少なく7,8人「先週はたった一人乗せただけ、軽油を撒き散らして走ってるようなもんだ」と運転手氏の軽口。

トイレが在る駐車場の片隅に持参のテントを張った。山を一周してここで食事会、青ガレ、金糞、湿原、北比良とぐるりと周る予定。オレはテント、鍋、コンロ、ガス、焼酎を担いできた、皆さんは食材となんとビールまでであった。腐ってはいけないものとビールをテントの底に収納、テントの中にその他のパーティグッズを入れ入り口を閉じた。いつもは比良駅から荷を担いで小一時間歩くが、今回はここが出发点、バスに乗ったこの小一時間の短縮は有難い「へええ、楽だ」と驚くほどのお得感なり。すぐに青ガレに着き、金糞峠にも簡単に行き着けた。金糞峠は相変わらず風がきつい、今日の暖かさにはこの風は心地よいが、冬の季節はちぎれるように冷たい。峠を抜けると雪が出始めた、まだまだ雪が残っている。冬には足がずぼずぼ潜って歩きにくい処、ワカンが必需品の処、4月の中旬なのに20センチ30センチの雪が続く、防水の効いていない靴は少々濡れてくる、小川を流れている水は全く無色透明、時々大きな木が倒れている、風が原因なのか雪が原因なのか自然林が続く、何時も居るイモリが居ない、水の中に真っ黒い身体が這いまわる姿が見えない、まだ冬眠中なのかな。イモリ君、上から見ると真っ黒なのに腹は真っ赤、初めて見た時は感激したものだ。

相・垣・前・オレの四人組「もうすぐテント」「ビールが待ってる」と騒ぎながら下りてきた、氷の入った保冷袋の中の肉もビールも無事冷たい。早速テントの横にシートを敷き、コンロを出し鍋を出し水を入れ火をつけた。食器を出し箸を出しコップを出しビールをそそぎ、「さあ、乾杯」である。たくさんの野菜、肉のつみれ、旨い。もう雪が無いとはいえ山の麓は気温が低い、何時もの事ながらガスコンロの火力は弱い、「ガスが足りないのでは」とヒヤリとしたが最後のオジヤの時点で滑り込みセーフのようなアウトのような、まずは終了。一杯機嫌と山の疲れで電車の中では眠ってしまった。

沖浦和光著<陰陽師の原像-民衆文化の境界を歩く>を読んで。

本の初めの処に、沖浦先生は子供時代、大阪市阿倍野区の釜ヶ崎に近い地域の長屋街で育ったそうで、周りには薄汚れた装束をまとった遊芸民・香具師・世間師・布教師の姿をよく目にしたらしい。「乞食人（ほかいびと）」とみなされた彼らを異界からやってくる「訪れる神」（まれびと）と折口信夫が説いた。折口信夫もこの界隈で育ったらしい。沖浦先生も彼らを見てその人たちの歴史と民族に終生深い関心を寄せたそうだ。それを読んでオレも多くはないが子供時代に見た、ちんどん屋は何回も見た、蝦蟇の油売りも見た、小学校の近所のお寺で祭りか何かの日、刀か包丁かを取り出して自分の手を切っていた、血が出ていたのを覚えている。バナナだけではなく服やら雑貨を叩き売っておっさんの叫び声というのか漫才のような掛け合いも面白かった、占い師は今でも何処にでも見られる。獅子舞も何度か見たことがある。「いう事聞かへんかったら、獅子舞に売るで」と親から言われたものだ。

沖浦先生が阿倍野の清明小学校に通っていた当時「陰陽師」「安倍晴明」という言葉は死語だったそうだ。江戸時代・明治時代に民衆を無知蒙昧にとどめ置く輩として、陰陽道を布教することも陰陽師を名乗ることも禁止された。千年の歴史ある陰陽寮は廃止され、宮中の陰陽道に関わる祭祀儀礼の全てが廃絶した。「山伏」で親しまれた修験道も同様の措置が取られた。陰陽師や山伏は雑多な神仏を祀る巫術系の信仰とみなされ民間で普及してはならないと布告された。陰陽師が20年30年前に若者たちの間で復活した、漫画・映画・安倍晴明ブームだ。ただし沖浦先生いわく、陰陽道本来の呪術性を合理的に一刀両断しない、珍奇なオカルト現象として陰陽道の秘儀を読み取らない。長い歴史において「アミニズム」「シャーマニズム」に連なる「呪術」「巫術（ふじゅつ）」思想史的意義と原像を見損なうことになる。この話になるとオレは無知ゆえわからない、陰陽道には文献がたくさんあって奥が相当深いようだ。

陰陽師とはいえ、安倍晴明に代表される朝廷に仕えた官人陰陽師と、民間の陰陽師が居たようだ。

民間の陰陽師とは古代から巫覡（ふげき）の仲間、社会的地位も低かった。彼らは民間信仰の最前線で、有史以前のシャーマニズムと新しく渡来した道教系の巫術に連なる遊行者として活躍した。農耕を基盤とせず日本文化史の負の部分、隠微な闇の領域として歴史の深部に埋め込まれてきた。「雑業」「雑技」「家内安全・五穀豊穰・商売繁盛などの祈願、災いを除去する加持祈禱」「日時の民間暦」「方位の占い」「万歳などのハレの祝福芸」「漢方治療や鍼灸術<野巫医者語源>」「猿楽能-乞食所業」「人形浄瑠璃-傀儡芸」「歌舞伎-河原乞食」並べてみると出てくるねえこんな物もあんな物も、なるほど社会の裏の部分というが、潤いの部分、大事な部分だよね。日本は古代以来農業中心の国家「農本主義」が貫かれ、土農工商から外れた職種・人種はポジションが低く扱われていたようだ。ヨーロッパでも「ミケランジェロ」「ダヴィンチ」その他の偉大な芸術家もほとんどが貧乏で身分が低い。死んでそこら辺の穴に放り込まれた大音楽家は誰だったかな。

少し前までオレは「そんなものは社会に認知されていない」「誰もがそっぽ向いている」「非科学的なものは信用も信頼も出来ない」と言っていた、ところが最近「ちょっと待てよ」とオレの脳が信号を送ってきた。「社会の反対側が本当にオモロイじゃないのかな」古くからの仕来り、古くからの慣わし、それはいい、そういう事守ることによって社会が明るく保たれる、社会の基本だ、それこそ人と社会の契約だ、そんな事はわかっているが、反社会的な部分が寄り添ってくる、近寄ってくる、この年になってぞくぞくするねえ。5月のGWに大峰奥駆道を歩く、6泊7日の予定で吉野から熊野本宮まで歩く。同道するキヌちゃん4.5年前から毎年大峰奥駆道を歩いている、1.2泊を2.3回で走破している、講のようなお寺のような処に所属して仲間と歩いている。彼は修行のために歩いている、白装束に錫杖という杖を突いて歩いている、今回も勿論目的は修行だと思う。オレの目的はとふと考えて「精霊に会いたい」そうだ精霊に会いたいそして感じたい、精霊がどこから来るのか、山に居るのか木に宿っているのか、目に見えるのか、オレの心に入り込んでくるのか、そういう事は全くわかっていないが、今回さえそんな気がしている、親しくなれそうな気がしている。ただ7日間の食料と水とシラフは重そうだ。

二度目の木地山にやってきた、此処は滋賀県と福井県の県境に長く連なる高島トレイルのいちポイントの麓の村、昔は戸数が百軒近く在ったらしいが過疎化が進んで今は戸数十軒の村になってしまったようだ。大阪を早朝6:00時に出発、キヌちゃんと千春君が迎えに来てくれた、前にも来た駒ヶ岳登山口に8:00に着いた、福井の人は“若狭駒ヶ岳”というそうで、滋賀の人は“駒ヶ岳”というそうだが、オレは“若狭駒ヶ岳”と呼ぶことにしている。駒ヶ岳は日本にたくさんあり“木曾駒ヶ岳”“甲斐駒ヶ岳”は言うに及ばず、検索すればずらずらと並んでいる、「山の形が馬の形、雪形が馬の形をしている、独楽（こま）の形をしている」とこのような能書きはさておいて、大阪から2時間でやって来られるというのは、一人なら少し退屈するかもしれないが、話しながら車を運転するには丁度いい時間だ。信州の山に登っている時、関東からきている人が多い、信州は東京から3時間で来られる、たった3時間で信州に着いてしまうのに比べて関西から大阪からは、5時間かかってしまう。3時間は無理すれば日帰りコースの時間、早朝に家を出発して信州の山を5時間6時間満喫してからそのまま帰っても一日の行程としてはお釣りは来ないが充実した一日だ。

高速：京都東ICから湖西ドーロ、堅田から朽木に向かう途中にそれこそ“途中”という地名が在る。オレが勝手に想像し決めてかかっているのだけれど“途中”は日本海と京都の都を結ぶ街道の途中にある、旅人も物を運ぶ人も牛馬も「まだまだ途中だ」とこの辺りで声をかけておのれを励まし、疲れを癒していた場所なのでこの名が付いたのではと思っている。堅田を過ぎた辺りから人家が無くなり山と田圃、日本の何処にでもある風景、川が流れ流れの中には石ころがいっぱい、その間を透き通った水がゴーゴーと流れる、山が迫る、木が生い茂る山がすぐそこに在る、川の傍に田畑が在る、狭い田畑だけ稲が実り野菜が育つ、とんがり屋根の日本家屋、元藁葺の上をトタンで覆っている。村の中に一際大きな屋根が寺だ、人の姿はない、煙も上がらない、静まりかえった村の風景。先週の比良山で見た風景と同様、山の斜面には桜と白い辛夷が咲く。“途中”を過ぎるといよいよ人家も少なく横を流れる葛川（下流は安曇川から琵琶湖）の右に左に時々集落が在るだけ。

さあ登りましょうと歩き始める、人の少ない山、道もあやふや踏み跡もあやふや、とにかく上へ、低い山なのですぐに尾根道にたどり着く、なだらかな尾根道この辺りがきれい、まだ寒さの残る日々、特に今日は曇天で冬の寒さ、冬の風の冷たさが残る、辛夷が咲くだけで幹と枝の木々には新芽も若葉もまだ開いていない、幽かに日本海が見える、医者の子キヌちゃん「Sさんが癌と診断された、メールが来ていろいろ相談された」「・・・」Sさんは我らの山仲間、この2年3年は山に行く回数も減ってきたが、ちょっと前まで毎月のように信州に行っていた、Sさんと二人きりで行った事も何度もあった。Sさん癌がまだ見つかったばかりで、これからどんな治療をするかの検査段階らしい、5歳上なのにオレと同じように体力が衰えだし同じようなセリフを吐いていた「しんどい、ばてた、歳だねえ」早く治ってまた信州へ行きたい、同道したい。「Sさん、いこうね」

キヌちゃん専門家の立場でがん治療の今、放射線治療と重粒子線治療の説明をしてくれる。聞いているとどちらも放射線を当てることによって癌を叩く、癌を焼くということらしい。ただそれぞれの線によってうまく当たる、当たりにくい、こちらなら適格に当たるという違いが在るらしい。重粒子治療の事は聞いたことがある、価格が高い、施設が少ない、工場のような設備が必要、この話を聞いて、オレならパス、払えないもんねとすっぱりパス。

しかしすごいね、人の身体の中に出来た“悪”を見つける“悪”位置、今の状態、次の状態、変化、その“悪”に向けて精密に効果的に熱で攻撃する、今のデジタル戦争でも見るような世界、夢のような治療だ。夢というならそれこそ“不老長寿”これが現実問題として存在する受け止められる世の中が来ればすごいね、体力の衰え、老化が無くなり、何時でも元に戻せる若き日に戻れるそんな妙案妙薬が出来ないものかね、でも「不老長寿はアカン、だめ」とオレはいう、とはいえ、長生きもしたいね。

ゴールデンウィーク<GW>は「大峯奥駆道を歩く」一年前から決めていた、同道するキヌチャンのお誘いに「行くぞ」と答えて一年。大峯奥駆道（峯と峰は同じ字のようだ）昔から山岳修行者の修業の場、奈良の吉野から和歌山の熊野本宮大社までの100キロ以上の距離を歩く、1200メートルを超える高さの山々の尾根道を歩く、吉野から出発するのをく逆峯>という、途中<女人結界>の場所があり、いまだに男だけの世界のように。<結界門を突破して通過した女人の強者も居たようだ、女の人には女人専用迂回路が在るとか>

今までたくさんの山を登ってきたが、ほとんどの山の頂上には祠が在った、神が祀られていた、山が神としてまつられていた、近代登山が始まった100年よりもっと以前の古代から、山は修験道の場として修行者が登っていたようだ。普通の人は山を眺め、畏れ、神として崇めた、一部の人が山に入り林業、狩猟、炭焼き、そして修行者が登った。今回、同道のキヌちゃんは4回目の修業の登山、ならばオレには修行はないが「精霊に会う、木の精霊、山の精霊、天の精霊に会いたい」と思っている願っている。

「朝5:18分の電車に乗って梅田で集合」「食事は非常食を含めて15食」「一日目二日目の5食、昼・晩・朝・昼・晩はそれぞれ持参」「コンロ・ガス・ツェルトは共同装備」と連絡が入る。彼は学生時代自転車部に所属し、全国を何日もかけて走り回った事が幾度もあったらしく、長期の行動予定には慣れている。行動の時間割、地図の検索、持ち物忘れ物等の装備品、食糧管理、といった事がお手の物のようだ。“鍋でコメを炊く事“が簡単に出来るようで、これはオレは自信が無い、多分焦げ付くか不味いだろう。7日間の長期間を山に滞在、しかも食事付きの宿泊は一回だけであとは無人小屋・避難小屋、テントこそ要らないが寝袋、食料、水、服、般若湯、考えるとリュックの重さが思いやられる。

今までで鳳凰三山が一番長期かなと手持ちの<山の地図：甲斐駒・北岳>を出してみると94年の5月とメモ書きが在った。40歳代の元気盛り、仲間5,6人と行った、全部小屋泊まりだった、と当時を思い出して地図を追ってみた。あの当時はいつも深夜12時頃に車で出発していたが、縦走して下山場所が入山場所と違うので列車を利用した。夜8時頃信州行の列車“ちくま”に乗った「さあ宴会」とビールに酒、あては・・・と騒ぎながら2,3時間の睡眠で深夜に塩尻→伊那と列車を乗り継いだのか覚えがないが、駅舎で寝袋を出しひと眠りした覚えがあるのでこの時乗り継ぎの時間待ちにひと眠りしたのかもしれない。タクシーで戸台に入ったと思う、当時まだ現在のバス停は工事中で、北沢峠までバスが在ったか無かったか記憶にない。何回か戸台から北沢峠まで3時間ほどかけて歩いた記憶がある。昼前に仙水峠辺りの“桃源郷だ”と感激した美しい景色を覚えている。途中2泊したと思う一軒の小屋、布団は湿った寝袋、食事は“ボンカレー”と御飯、写実の小鳥のペン画が妙に当時風、同世代の小屋主のおっさん「儲からないね」という顔で我々と同じこたつに入って歓談していた。夜又人峠に降り山下夫妻らと合流し宿に泊まった。山の地図にはコースタイムが書いてある、コースタイムとはここからここまで軽いリュックで普通に歩いての所要時間、登りなら00分、下りなら00分と記されている。40歳代の当時早いときにはそのコースタイムの5割7割の早いスピードで歩けた、20キロ以上の重さの荷を背負ってもコースタイムの時間で歩けた。

遠藤ケイ著<熊を殺すと雨が降る>を読み始めた、まずは山の木を切る話、杣人の話。過って“杣（そま）”と呼ばれた原木の伐採を行う職人は、時代を経るに従い伐採賦、あるいは伐木造材師などと名をかえ、チェーンソーの出現により伐採方法も大きく変化した。「何十年山に入って木を伐っているが、その瞬間は気分のいいものではない、命ある木を伐ることは罪深い事だ・・・」昔のように大きな木を斧一本で切り倒すには相当な体力技術が要ったようだ。このように山への畏怖と畏敬の言葉がどんどん出てくる。読み進んだらまた紹介しましょう。農業の事はちらほら見聞きしていた、漁業の事も少しは見聞きしていた、山の仕事はほとんど知らなかった。福永氏が東京で個展をする、絵とブロンズ彫刻の小品展のようだ「これは売れそう、どんどん売れなよ」といっているがなかなか売れないらしい。今日はアートの話ではなく、彼の話、彼は四国四万十川の山育ち、炭焼きも、自然薯採しも上手いものだ、木の事もよく知っている、次回飲んだ時に聞いてみよう。